

教育の現場から

★ Special

公立申高一貫校入試のいま

秋田洋和

あきた・ひろかず

1966年生まれ。進学塾講師。高校受験数学・中学受験算数を教える。都内公立申高一貫校土曜講座の授業や、私立中学の教務コンサルタント等、塾の教室を飛び越えて幅広く活躍中。監修本に「中学生の成績が上がる! 教科別「勉強のルール」最強のポイント65」(メイツ出版)がある。

首都圏・関西圏ともに中学受験率が頭打ちになったといわれています。ところが公立申高一貫校に限っては、その人気が年々加熱している様子がデータからはっきり見てとれるのです。新設された学校の多くで卒業生が始め、彼らの大学合格実績が当初の予想を上回っていたこともあって、この人気はしばらく続きそうな気配です。

今月は、公立申高一貫校受験を考えていらっしやる方々に向けて、入試の現状と来年度の予測、そして留意点を紹介していきます。

■公立申高一貫校はなぜ人気があるのか

2013年度の入試では都立の申高一貫10校で1万人を超える志願者を集めました。「東京都の小6生全体のうち10人に1人が受検している」というほうがその人気のほどが伝わるでしょうか。

公立学校の人気が強い首都圏以外の地域の皆さまに向けて簡単に説明をする、この10年余り首都圏では「ゆとり教育」への危機感が追い風となって、空前の「公立回避・中学受験」ブームが続いていました。経済状況の変化や「脱ゆとり」の流れの中で、この数年中学受験率は頭打ちになっていますが、その中で公立申高一貫校を目指す層だけが伸び続けているのです。つまり、首都圏における公立申高一貫校は「公立中学」「私立中学」に続く第三の選択肢として、すっかり定着したといえるのです。

その理由としてまず考えられるのは、

「低いコストで、無理のない受験準備で、楽しい学校生活の中で、しっかりと大学に合格させてくれる」というお買い得感です。次に、選抜方法が「適性検査」と呼ばれる独自の試験を用いているため「公立申高一貫校であれば、私立受験ほどのハードな受験勉強は必要ないから」というお手軽感があるようです。どちらにしても、「私立受験と比べたときのハードルの低さ」をメリットと感じていることは事実のようです。

「首都圏保護者の中学受験に関する意識と行動に関する調査(ベネッセ教育総合研究所)」によると、首都圏で「中学受験を考えている親」が考える第一志望は、すでに私立中より公立申高一貫校が上回り(表1)、受験校決定に関しては「経済的負担」への意識が大きく影響しているようです(表2)。

2013年度入試において首都圏では公立中高一貫校の新設がありませんでしたが、全体的に前年までと同様の狭き門となっています。特に1期生（2012年卒）から東京大学に4名もの現役合格者を出した桜修館では、出願者数が前年に比べて男子で36.6%、女子で42.7%もの大幅増加となりました。

小石川、九段など、前年（2012年度）に比べて出願者数を減らしている学校もいくつかありますが、それでも依然高倍率で推移していますから、決して合格しやすくなっているわけはありません。まだ1期生を卒業させていない学校（三鷹・富士など）も、

■首都圏公立中高一貫校の受験概況

表1 あなたが受験させようと思っている第一志望の中学校

私立中学校	31.5%
国立中学校	7.0%
公立中高一貫校	34.3%
その他・まだわからない	27.2%

表2 受験校を決定する際重視すること

項目	第一志望が私立中	第一志望が公立中高一貫校
授業料などの経済的負担が少ない	63.4%	90.1%

表3 首都圏公立中高一貫校（一部）の出願者数と志願倍率推移

学校名		2012年度	2013年度
桜修館	男	475名 (5.9倍)	649名 (8.1倍)
	女	597名 (7.5倍)	852名 (10.7倍)
小石川	男	618名 (7.8倍)	527名 (6.6倍)
	女	515名 (6.4倍)	454名 (5.7倍)
九段 (B)	男	366名 (9.2倍)	324名 (8.1倍)
	女	395名 (9.9倍)	361名 (9.0倍)
白鷗	男	487名 (6.7倍)	518名 (7.0倍)
	女	659名 (9.0倍)	724名 (9.7倍)
両国	男	462名 (7.7倍)	463名 (7.7倍)
	女	460名 (7.7倍)	515名 (8.6倍)
さいたま市立浦和	男	344名 (8.6倍)	282名 (7.1倍)
	女	379名 (9.5倍)	305名 (7.6倍)
千葉県立千葉	男	635名 (15.9倍)	589名 (14.7倍)
	女	524名 (13.1倍)	488名 (12.2倍)
相模原	男	754名 (9.4倍)	703名 (8.8倍)
	女	811名 (10.1倍)	791名 (9.7倍)

その期待感から高い志願倍率を維持していますので気を付けてください。埼玉では2013年度に1期生が卒業したさいたま市立浦和の動向に注目が集まります。前年志願者が減ったことによる「揺り戻し」と、1期生の大学合格実績の評価の両方を慎重に検討する必要があるため、14年度の予想は難しいのが現状です。

千葉県立千葉は、県下トップの学校に中学を併設した意気込みとその伝統が評価され、毎年桁違いの高倍率となっています。

まず、付け焼き刃の学習では太刀打ちできませんので、計画的な準備が求められます。

神奈川県では、2010年に初めて開校した平塚・相模原の2校から卒業生が出るまでは、その期待感から志願倍率は高止まりが予想されます。

学校の人気度は、今年度の桜修館のように大学合格実績によって急激に人気が上昇する場合がありますので、最新情報を収集するように心がけてほしいと思います。

■関西圏公立中高一貫校の受検概況

関西圏においては、公立高校の人気の首都圏に比べて強いこと、学校の立地によって志願倍率が大きく変わるなどによって、首都圏と同じ視点で倍率だけを比べて公立中高一貫校に対する人気度を測ることはできません。

注目すべきことは「志願倍率が横ばい、あるいは上昇している」学校が多いこと

表4 関西圏公立中高一貫校（一部）の出願者数と志願倍率推移

府県	学校名			2012年度	2013年度
京都	府立洛北		男女	498名 (6.2倍)	507名 (6.3倍)
	府立園部		男女	85名 (2.1倍)	98名 (2.5倍)
	京都市立西京		男女	888名 (7.4倍)	844名 (7.0倍)
大阪	大阪市立 咲くや この花	(言語)	男女	131名 (6.6倍)	132名 (6.6倍)
		(ものづくり)	男女	146名 (7.3倍)	151名 (7.6倍)
兵庫	県立芦屋国際		男女	351名 (4.4倍)	368名 (4.6倍)
	兵庫県立大附属		男女	173名 (4.3倍)	183名 (4.6倍)
和歌山	県立向陽		男女	525名 (6.6倍)	500名 (6.3倍)
	県立桐蔭		男女	394名 (4.9倍)	455名 (5.7倍)
	県立古佐田丘		男女	181名 (2.3倍)	175名 (2.2倍)

です。卒業生を輩出した学校であればその大学合格実績に応じて志願者の増減がありますし、新設されたばかりの学校であれば「開校2年目以降の志願倍率は少しずつ下がる」傾向があるのですが、具体的に志願者数が増加している結果からは、関西圏においても公立中高一貫校の認知度が着実に上がっていることがわかります。

今後、新しく開校した学校から卒業生が出るようになると、関西圏における公立中高一貫校の評価が固まってくるはず。京都市立西京のように、伝統ある公立高校や難関私立と競い合うような合格実績を出していく学校と、お買い得感やお手軽感に魅かれて主に地元の子が入学してくる学校に分かれていく可能性があります。学校選びのポイントは大学合格実績だけではありませんから、入学後何をやりたいのか、どんなことを身につけたいのかをしっかり研究し、それを実現できる学校を探していきましょう。一口に公立中高一貫校といっても、その内実は学校によってかなり差が出てくるものが予想されるのです。

■2014年度はこうなる！ 傾向と対策

このように年々人気が高まっている公立中高一貫校の人気ですが、志望校合格を勝ち取るための戦略として考えておきたいのが「私立中学との併願の可否」です。京都・大阪では公立中高一貫校の受検日が1月19日（私立中学の解禁日と同じ）ですから、おそらく多くの方が第一志望として公立中高一貫校を意識することでしょう。それに対して都内の受検日は2月3日ですから、2月1日・2日

に行われる私立中学入試を第一志望と考え、公立中高一貫校との併願が可能になるのです。

これによって、受検準備の仕方が大きく変わってくるものと考えておきましょう。ある教育調査機関の調べでは、これら都立中高一貫校を併願する私立中受験生の多くは、偏差値60〜65のいわゆる難関校志望だといえます。私の経験では、中学受験での偏差値50は、一般的な公立高校入試での偏差値65程度にあたりますから、こうした併願者の多くは成績だけを見れば「小学校では学年でもトップクラスの優秀生」ということになります。

そのため、公立中高一貫校独自の傾向に合わせた対策（作文など）はもちろんのこと、私立中学入試組に負けないだけの基礎学力や知識、テクニクも最低限身につけておくことに越したことはありません。

公立中高一貫校ブームは、これまで中学受験を積極的に考えることのなかった層に「ダメもとでチャレンジ」と関心を持たせる効果を生んでいる一方で、私立受験を目指している層にとっては格好の併願校になってしまっているのです。皆さまの志望する中学がどのような状況なのか、それを調べる手段として「当日の欠席者率（欠席者／志願者）」に注目しておくことをお勧めします（表5）。

表5 公立中高一貫校（一部）の欠席率（2013年度）

学校名		受検当日欠席率 (欠席者/応募者)
首都圏	小石川（男）	4.6% (24/527)
	小石川（女）	11.2% (51/454)
	桜修館（男）	4.6% (30/649)
	桜修館（女）	7.2% (61/852)
	両国（男）	4.1% (19/463)
	両国（女）	3.3% (17/515)
関西圏	和歌山・向陽	11.4% (57/500)
	和歌山・桐蔭	13.2% (60/455)
	兵庫・芦屋国際	9.0% (33/368)

学校ごとに欠席者数を見ると、首都圏では全体的に女子の割合が高くなっています。これには首都圏の高校入試（特に私立）の枠が女子にとって厳しいという事情も反映されていて、女子のほうに「公立中高一貫校を私立中学の保険として考える」傾向が見てとれるのです。今後学校の人気が上がると、併願層のレベルもさらに上がる可能性もありますので、今後の動向に注目してください。

また、私立中学と違って合格者を多めに出すことをしませんから、欠席せず実際に受験をした人はそのほとんどが公立中高一貫校を第一志望として見ていることとなります。入学定員の少なさからも

わかるとおり、お手軽なイメージに対して現実は「非常に狭き門」であることを知っておいてほしいと思います。

最後に、公立中高一貫校をお考えの場合には、私立中学受験よりも念入りの情報収集を心がけてください。学校ごとの裁量が認められている分だけ教育方針やシステムはバラバラですから、勉強面において授業レベルやスピード、宿題の量などは我々保護者が中学生だった頃と比較しても想像以上に大変です。生活面では、通学範囲が広いため部活動が本格的になれば帰宅時間も遅くなりがちです。お子さまの体力を考慮した生活リズムのシミュレーションも欠かせません。

お買い得感やお手軽感に基づく安易な学校選びは、お子さまの性格や処理能力によってはミスマッチの原因にもなり得るので十分に注意してください。広い視野を持って、お子さまに最も適した学校を選んであげましょう。

資料

- ベネッセ教育総合研究所 中学受験に関する調査 2012年
- 各種データ
- 四谷大塚入試情報センター 出願倍率速報と入試結果